

---

# クラッド

Akira

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クラッド

### 【Nコード】

N1542R

### 【作者名】

Akira

### 【あらすじ】

大企業の社長の息子である主人公、宮内<sup>みやのうち</sup> 吟<sup>ギン</sup>はとある日に謎の集団に撃たれ気を失ってしまう。目覚めた時には謎の「世界の崩壊を止める為の組織」の施設の中で、ギンはとある使命を受ける、それは、異世界に人間を移す機械、「クラッド」に乗り異世界に行き、世界の崩壊を止める方法突き止めるという事だった。そしてその異世界ではギンの、想像を絶する運命が待っていた。そしてその世界には三年前に死んだはずの彼女がいて？地球の破滅と自分の運命を賭けたファンタジー。（何回挑んでも勝てないけど、最後は勝つ。

という展開がお好きな方におすすめです

## 第1話 決意

「神は天の下に人をつくらず」とか言う言葉がある。だがそんな事は嘘、人は親によつて才能が違うものだ。そうこの「俺のようにな！！」彼、宮内みやうち 吟ギンは叫びを上げた。彼の建てた高層ビルの屋上からだ。大学2年生権大企業の御曹司+3つの会社の社長を務めるいわば「勝ち組エリート」という奴である。屋上から新宿の空を一望する。完成したばかりの建物でひときわ高く、目に新しい風景だった。緋色の空が辺り一面の建物にその色を焼き付かせていた。そんな彼がとある日失踪してしまう事になるとも知れず。

そのとある日の事だった。親友の鈴木とともに大学から帰る日の事だ。新宿の駅を降りて二人で話しながら路地を曲がっていくとまったく人の気のない道に出た。

「あれ？…」

鈴木が不思議がる、この道は月日を問わず毎日のように賑わっている場所のハズだ。おかしい程の静寂の中、音が響いた、その音を聴き違えるはずもなく、ギンと鈴木の耳にはなにかが走ってくる音が、恐ろしくはつきりと聞こえていた。気づけば二人は走り出していた。何かを追いかけてくる、そして逃げ切った、と、思った瞬間銃声が鳴り響く、二、三回と響き終わる時意識が遠のいた。

「麻酔：銃？？」

自分の身体に起こった異変を確認するように薄れる意識のなか残る力を振り絞り呟やいた。意識が消える瞬間に、自分と鈴木を撃ち抜いた男の野太い声が耳の中に入り込んできた。

「標的の宮内ギンと思われる人物の確保終了しました。ええそつで

す、遺伝子は……」  
ここで意識が途切れた。

声が聞こえ目の前の闇が晴れてゆく、俺は死んだのか？こんな所で死にたくない。その気持ちとは裏腹に走馬灯が頭に流れた。三ヶ月前に購入したマンションが酷く懐かしく感じる。さまざまな出来事が遠い記憶のように頭に流れ込んでくる。これが死の淵まで追いやられた人間の遠く悲しい刹那の感情なのか、居るのかも分からない神などに自分の生存を、ただ祈った。

「目え覚めたか？」

「強力な麻酔銃だとなかなか起きませんね……」

「叩き起こしやええやろ」

「そんな無茶なことしないで下さいよ！」

二人の会話が一言ずつどんどん大きくなってゆく関西弁を話す男性と女性だ。次第に目の前の風景もしつかりくつきりと映ってきた。ここはどうやら何かの部屋で自分はそのベットに寝かされていた。右腕には点滴が付けられていて、顔を動かそうとしたが鉛のように重く身動きがとれなかった。ここは何処だそしてお前らは何者だと問うが声に出ていないらしく、口がわずかに動いただけだった。男が首を傾げわざとらしく微笑みを返してくる。その様子を見た女性が男に注意を飛ばす。

「こら！知床さん！何してるんですか？！彼に説明する為にここにきたんでしょ？」

知床と呼ばれた男は切れ長の目をこちらに向けながら女性にすまんすまんと返す。

「反省の意もないでしょう……まあいいです」

そこで置いてきぼりになっていたギンに彼女が気づき自己紹介を始めた。

「あっ私総合分子研究課開発員の山本奈津です。でこちらが総合分子研究課副局長の知床冷多です。」

「冷多や、よろしく」

「ここは…どこだ!？」

「まあええよどこでも、君に会わせたい人がおるんや。」  
「どうやら誰かが自分に会いたいらしい。」

「お前らっ!! いったい何なんだ!! 鈴木も何処にやっ…」  
「まあええからついてき」

冷多が冷たい微笑みを飛ばしてきた。背筋が凍り付くようにゾツとするような妖しい切れ長の眼の中は深く恐ろしい金色の眼光が見える。逃がさないとも言われているような縛られている感覚に襲われた。直視が出来ない、このまま冷多の眼光を見続けていると潰されそうになる、おかしくってしまいそうだと思う目を見逸らした。  
「どした?」

冷や汗を流すギンに冷多はわざとらしげに首を傾げた。気をまぎわらす為に冷多が話を始める。

「なんで君をここに招聘したか、知つとる?」

「誘拐だろコノヤロウ」

「君は選ばれし人間なんや」

「実はな、三十年後ぐらいに世界はな」

冷多がそこで息を止めゆっくり口を開いた。

「消えてゆくんや」

「は!!!!?」

そんな訳がないとギンが罵った。だが冷多の悪戯っぽい笑みは無かった。こいつは本気で話している。

「こっからが本題や、耳の穴かっぽじって聞いてき。」

三年前とある国の首都で、この世界、地球のすべてを構築してい

る物質が次々に消えてしまう現象が起こった。そして地球自体の磁力も乱れ、大気圏が鱗のように剥がれてしまう現象に繋がってしまった。という事が予想される。その事件は報道されず、その国の重役ぐらいが知っている事件だったが、三年間の研究で三十年後にまた起こるといふ計算が出た。

しかも次の時には大気が地球から離れてしまう。それが世界の終焉の時となる。それを止める為、冷多達が動き始めたのだ。そして、とある機械が開発された。人間を異世界に飛ばす機械である。その名を「クラッド」と言う。

しかしクラッドは通常の人間に使用すると何も無い空間「無」に飛ばされてしまうので遺伝子強化された特殊な人間でないと成功できない。

そして冷多達、総合分子研究課の目的は地球の崩壊を止める為、ギンを異世界の惑星に送り込むのだ。その異世界は「人間のいる惑星」いわば第二の地球に行くという事だ。目的の惑星にはクラッドが高速計算し、その条件にあった星へと空間をねじ曲げ一瞬でその場所にギンを空間転移させるのだ。平たく言えば小さい網を無理矢理引っ張って網目を大きくしそこにボールを投げて通すやり方である。

「……こんなとこやな」

「おい、俺が行く事前提になつてんじゃねーか！誰が行くか！」

「何いってんの？君無理矢理確保させたのボクやし」

「てめえだったのか……」

そう聞いてしまえば納得できる。冷多は多少強引に話をすすめた。「そっぴや君に会わせたい人がおるっていつてはったけど、この写真見てみ」

山本が前に居る冷多に写真を一枚渡す、何の写真かは、ベットの前にいたために身を乗り出す事が出来ない。冷多がギンにその写真を見せる。ギンは写真に映っている人物に驚いた。その写真には自

分の恋人が映っていたのだ。

「この娘ね。向こうの世界の君の彼女さんなんやで」

その言葉を噛み締めるように確認するように繰り返した。

「向こうの…彼女…」

「そこがおかしいんや、なんで向こうに居るのか」

「そんな…死んだ…はずじゃ」

「どや？行く気、なつた？」

彼女のあの不可解な死に方はずっと分からなかったが今道が開けた気がする。捜さなければいけない。彼女の無念を晴らさなければならぬ。ギンは考えた末に答えを返した。

「ああ、行かせてくれ！」

「そか、なら着いてきてみ。」

それから冷多は細い目をさらに細めて言った。

「じゃ、次は試験や、試されるのは…君の命や。」

点滴を外してドアを開け、冷多の後ろに同行する。廊下は病院の廊下のようにずっと長く広がっていた。横を見回したが窓がない。

ここは地下なのだと言冷多が説明してくれた。エレベーターに入り向かったのは地下二十階である。数秒で着きエレベーターを出て向かったのは「ホールドルーム」と書いてある広い空間だった。

目の前には大きな緑色のガラスが敷き詰められたドーム状の部屋が広がっていた。

「このなかで戦ってもどんはに血い出しても出てくる時には治つてるんやで。さ、入るか。」

ホールドルームの中に入るとさっきまでの痛みや疲れが消え失せた。冷多が話しかけてくる。

「さあ、試験開始やそこにある剣を抜き、勝負や！」

冷多が剣を抜いた、どうやら剣での試験らしい。フェンシングや剣道なら全国トップ10に入った事が何度もあるギンは足下にある剣を拾った。



「行くぞっ!!!」

必ず勝って彼女を救ってみせると決意を刃に乗せて構えた。

## 第1話 決意（後書き）

最後まで読んでいただき、本当にありがとうございます。まだまだ下手ですががんばりますっっっ！！！！！

## 第2話 想いの剣(前書き)

俺は待っていたらしい、俺は赴こうとしている、俺を待っている  
血塗られた運命が…。

ギン

## 第2話 想いの剣

1

冷多が剣を構えると風を切り裂く音が響く、この金属音が冷多とギンの戦いの始まりの合図のように、ギンも拾った剣を構える、その剣は濡れた様な輝きを放つ片刃の刀だった。だが刀と言うには少し洋風で様々な所に装飾が付けられている。刃渡り九〇センチ程の刀で少し細身の剣だ。

剣を観察していると冷多が緊張をほぐす為か話しかけた。

「ん？どした？」

「あんた、俺と戦ってもイミねえだろ」

「今ここで戦わなくてもクラッドとやらは使えて、それで惑星へは行けんだろ」

まあまだ完全には信じてねえがな、と言葉を加えた彼の目の前に突然何か近寄ってくる気配がした。冷多が居て剣をギンの頭目掛けて振り下ろして来ていた。そこから感じたのは強烈な殺気だった。「くっ！！！！」

冷や汗が頭から額に滴り落ちていた。辛うじて冷多の剣を自分の剣で受け止められた。だが

「うあっ！！！！」

カランと乾いた音がした。細身の剣が地面に落ちていた。それと共に赤黒いものが一滴、二滴、血が剣を握っていた右手からこぼれ落ちていく、冷多の一撃で右手の皮膚が裂け血を滴らせていたのだ。「残念や、まだ…決意は整ってないんやな、そんなんで恋人…救うなんて永劫ムリや」

剣を落としたギンを冷徹な言葉とともに斬り払った。右肩から脇腹までとても深い斬り口から大量の血が溢れ、倒れる。

こいつ、強すぎる。

頭で感じる前に身体の全てがそう感じた。ギンは剣技世界大会でベスト十〇位に入る程の剣豪だった。それほどの自身と余裕があった。だがたった二振りで大出血し、地面に伏せて転がっているのだ。

「分かった？君の剣は軽すぎる、ボクの剣は重く感じたやろ」

ギンの視界のなかに冷多の剣が写っていた。その剣に写っていたのは敗北や苦痛に苦しむ自分の顔だった。絶望にも似ていた。そういえばコイツの剣はとても重かった。剣自体の重量の問題ではない。剣の重量なら自分の剣とさほど変わらない筈だ。

「まだ…立つん？キミ理解したんじゃないの？キミの力じゃ絶対勝てないって」

立ち上がっていた。動かない身体を無理矢理動かして。激痛はまだ身体中を巡り警告をしていた。安息と治療を要求している。それを無理矢理無視して話す。

「理解…はした…決意も…してない、だ…けどこれだけは…言える」  
皮膚の裂けた右手で剣を握る、その手から血が滴る。胸からも血があふれていた。そして全ての力を振り絞り叫んだ。

「お前を倒す！！！！！！」

「なんやキミは？もう限界で立ち上がることも」

そう驚く冷多にギンは間合いを限界まで詰め斬り掛かった。

「うおおおおおおおっ！！」

カキーンと金属音が響き冷多の剣に剣閃を響かせる。斬る事は出来なかったがこれならいけるとボロボロの身体を無理矢理制御しながら思った。だがギンの剣を受け止めた冷多はまた同じ事を言った。

「まだ…軽い」

「なんでキミの剣が軽いか…教えてやるか？」

ギンの剣を軽々しく振り払った。ギンの身体がこれでまた隙だらけになった。

「その剣でなく」

ギンはもう一度体勢を整えそして右足を軸にして回転しながら斬りつけるが見事に払われた。

「剣に乗せる想いが軽いからや」

そして二度目の斬撃を喰らった。だが今回は擦っただけでまだ動く事は出来る。

「ハア…ハア、想いだと？…お前を倒す事か？」

「違う…ボクを倒すだけのその場の決意じゃないんや」

じゃあ何を決意して戦えば良いのか、解らなかつた。

「ボクはたった一人の人を護りたい…それを信じて戦ってるんや」

じゃあギンは何を護れば良いのか苦悶した。

(俺の護りたくて、救いたいのは…)

四度目、五度目と斬られそのまま倒れそうになり意識を完全に失いかけた時、頭の中をとて大切な人の姿が浮かんだ。

最初で、最後の恋人

「俺は、必ず！！」

倒れそうになった身体を元の体勢に戻す為大きく右足を踏み込みつつ、重心が前に乗りかかった所で踏み込んだ右足で地面を蹴り、突進した。その時のスピードは今までで一番速かった。人間が繰り出せるような速さではない。

「っ！！」

冷多は目を見開いた、その速さに対応しきれず身構えた所を、ギンの勢いをのせた最大の一撃が繰り出された。

助けるんだ！！

剣と剣が衝突する。今までとは違い鈍い鉄の割れる様な轟音が響いた。火花を散らしながらギンが振り抜くと冷多の剣が破壊しその刃の半分が冷多とギンの間を落ちた。そしてそのままギンの剣が冷

多を斬りつけた。冷多は腹から血が飛びそのまま地面に崩れ落ちた。

「試験…合格や」

その口は笑みをたたえていた。だが冷多の言葉はすでにギンの耳には届いていなかった。

「ホールドルームから出たら全回復するけど。ホンマにボクより重い剣やなあ」

「関心した。と冷多は回復のためホールドルームから出る為に立ち上がる。」

「でも…キミの戦いはまだ始まってもないんやで」

「なあ、ハルデユ」

## 第2話 想いの剣（後書き）

とつてもお待たせしました。二話も御付き合いました。ただき有り難うございます。また三話も読んで頂ければ幸いです。



### 第3話 クラッド始動（前書き）

ボクは護れへんかった、あの時も今も…  
冷多

#### 登場人物紹介

主人公

宮内 吟みやうち ぎん

エリート風の大学生、三年前彼女を亡くしている

鈴木 尚すずき なお

主人公の親友、今何処に居るのか分からなくなっ

ている

知床 冷多しねとこ れいた

謎の研究員、ギンを異世界に送り届ける

### 第3話 クラッド始動

1

意識が戻ってくる。まず、椅子に座らせられていた事に気がついた。

「あれ？確か俺はあいつに……」

と視界を巡らせていると気がつけば目の前には冷多がいた。

「初めまして、知床冷多や」

「からかってんのかお前」

「分かってた？」

と冗談を交わすと冷多は満面の笑みを浮かべながら話した。しかもテンション高い。

「試験合格おめでとう！さて、お次はキミの後ろにあるあの機械の出番や！」

ギンの後ろには白衣を着た科学者が数名、そしてその後ろには途方もなく大きな機械の様なものがそびえていた。この前ギンが建てた高層ビルよりも巨大な機械だ。なぜか様々な部分にチューブががれている。

「なんだ…これは……」

この巨大機械からはまるで呑み込まれる様な迫力を感じる。驚くギンに冷多は淡々と話す。

「こいつが、地球の最先端の技術を注ぎ込まれた。未完成の第三試作品兵器、その名もクラッドや。」

「…国は…世界は何してんだ？」

冷多は笑みを深める。

「キミはコイツに乗って異世界に転移するんや。…向こうの世界で確かめたい事があるんやろ？」

気を遣う冷多にギンは椅子から立ち上がり、自分の胸を叩いた。

「ああ」

とやりくりしていると、ギンのよく知っている者の声が聞こえた。どうやら二人の会話を立ち聞きしていたようだ。

「クラッド…これに乗る気だな…息子よ」

「あんた…何…で此処に!!」

ギンの目の前に現れた男はギンの父親である宮内実数みやうちかず多の世界企業を立ち上げ大成功した男でギンの憧れに近く今のギンを男手一つで育て上げた男だ。だが、ギンはこの男が嫌いだった。実はギンが生まれた時から殆ど構いもせず、関わりも持たなかった、ある日の授業参観も、オール5の成績表を見せた日も、褒める事も見向きもなかった。だからギンも心の底から実を嫌ったのだ。

数秒間、いや、数分は経っただろう、静寂を切り裂いて実が笑った。

「フン…ギン、貴様の決心が本物ならば、審理の時は訪れるだろう」

「この兵器は世界を救う為の希望…クラッドは貴様を運ぶ船となる」  
正直、決意を決めたギンは親父の話で肩がこっていた。職業柄なのかは分からないけど長かった。

「ギン、貴様に最後に言っておく」

貴様貴様と息子に向かつて連発するか?!と思っていると、ポン、と優しく肩に手を置かれた。

「死ぬな」

その手から感じたのはさっきまで感じた威圧とは遠い、手のひらの温もりだった。その手を解き。

「死なねーよ」

と冷徹に返した。思えば、初めてだったかもしれない…

この温もりが。

「どした?」

と疑問系を放つ冷多に、

「KYが…」

と視界を邪魔する液体を拭いながら目をそらした。実はどこかに移動したようだ。

2

さつきから人の出入りが激しい。白衣の研究者達だ。白衣を纏った少女が通り過ぎるのを横目で見てみると、白衣を着た冷多が手を振りながら寄ってくる。助手の山本も一緒だ。

さつき居たクラッドの見えた部屋はメンテナンスルームで、今居るのはそこから出て少し歩いた所。エレベーターの前の広々としたティールームと書いてある部屋だ。科学者や研究者が疲れを癒す為のカフェがあった。ギンも何かを飲もうとしたがクラッドに乗る前は何か喰っちゃだめやでとかなんか色々な事を伝えられた。体温は必ず35度以上とか毛皮系とかモフモフ系の衣服や金属はダメだとか。特にヤバイのは

クラッド転移の失敗率67.4パーセント

恐っ！！アナタノクビトンデモホシヨウシマセン的な感じた。関西弁野郎曰く「キミならダイジョーブや」とか言ってたな。

……………

「ギン君…クラッドの準備完全完了や、準備はええか？」  
「ああ！」

少し苛立ちのこもった返事を返すと、冷多はエレベーターのスイッチを入れる。エレベーターのドアが開くと研究者達が数名出てきて冷多にクラッドの調子などを伝えていた。

クラッドは東京の地下数千キロメートル程に存在し、この兵器については世界でも極秘裏の管轄の者のみ知っている位らしい、ク

ラッド発動に要する電力は日本から中国全域の電気を利用する為ク  
ラッド使用の際には大停電が様々な国々に起こるらしい。しかも転  
移時の瞬間の波動により大地震が起きたり磁場が乱れたりするかも  
しれないと推測されている。

そしてギンが行く異世界の情報は我々と同じ人が暮らしている。  
という事だけだった。

気がつけばギンはエレベーターを出ていた、着いたのだ、クラッ  
ドがある所へ。

ドアを出ると、鉄製の巨大な扉がありそこを開くとまた扉があつ  
た。その先に出ると途方もなく巨大な機械、クラッドがそびえてい  
た。今度はメンテナンスルームから見たのとは違い真下からだった。  
槍のような機械的な構造を持つ兵器、よりは転送機だ。

クラッドの真下にさっきまでの大扉とは違い、小さな入り口があ  
る。

「なるほど、俺あ、あの中に入れば良いのか」

「そうや、ゆっくり入り口のドアが開くからじっとしとけや」

やがてメンテナンスの声と共にドアがゆっくりと開く。

耳をつんざく程の機械音が響きだす。

轟音の中、ギンは入り口を歩きながら呟いた。

「親父、冷多さん、鈴木、行ってくる。今行くからな、待ってる。」

ソフィ

異世界に消えたという恋人の名を呟きながら、歩く、クラッドの  
中に入ると自動ドアが閉まる。

振り返らずギンはただ前だけを見て歩みを進めた。

進んでいくと振動がかなり強くなってくる、そして突き当たりま  
で進んだ。広くて、暗くてどこか神秘的な空間。

「すげえ……」

いつの間にか振動は収まっていた。白い大気が周りを漂っていた。それが色を変え竜巻のようにギンを中心に回転し始めた。

「うああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

大渦がギンを飲み込もうとして寄ってくるのだ。

逃げ出そうとするが逃げ場が無くどうしようもなかった。ただ悲鳴を上げていた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」  
声段々と小さくなり。

「おおおおおお……………」

渦の中に消えた。

### 第3話 クラッド始動(後書き)

次回からは異世界篇ですっ！ここからが本番！頑張っちゃうのが本番！

また誤字脱字等がありましたらコメントよろしくお願いします。

第4話 氷河に現れた異人（前書き）

一流魔剣士って程じゃないさ。ただの老いぼれ。  
レイザス



## 第4話 氷河に現れた異人

1

朝日がやけに眩しい。

ここは異世界のとある町の長屋。照りつける朝日は長屋の中にもやわらかな光をもたらしている。

「あつさでつすよー！」

「長屋の皆さんー、起きてー！」

少女の声が長屋中に響く、元気で無邪気な声だ。

「レイザスさんー！起きてー！」

階段を駆け上がりながら住民を起こしにくる。レイザスと呼ばれた男は元気な少女に寝ぼけながら返事を返す。

「あはよう、つたくうるせえなあ」

「うるさいとかじゃなくて今日は仕事ですよー」

「眠い」

「寝ぼけないですよー！」

昨日は夜遅くまで魔法の調査に勤しんでいたというのに気の早い娘だなあ。仕事は正午だというのに。

頭をかきながらのんびりと顔を洗っていると。

「あざーすっ！ー！」

と勢いよくドアが開く。そのドアがレイザスに勢いよく激突した。

「痛いっ！ー！」

吹っ飛んだ。その姿を見たドアを開けた少女は慌てて謝った。

「あわわ、ごめんなさい！ごめんなさい！」

「いてて。まったく老体にはちときついわ」

「老体ってまだ四十の中年だよな。レイザス」

尻を擦りながら起き上がるレイザスに、少女は持ってきた朝食をテーブルの上に置きつつイスに腰掛ける。

「仕事はどれにするの？」

「ああ、もう決めておいた。北のゲルイル氷河の調査、危険生物の討伐、ランク三のお仕事の割りにゃあ高額だ。」

「いいねっ!!あたしも行く!」

「おまえも来るのか、ソフィ」

レイザスは彼女の同行に否定しなかった。このか細い腕でも実力派なのだ。魔法は使えないがガンナーとしての技術には優れているのだ。魔法剣士であるレイザスには心強かった、魔法での遠距離攻撃は出来るが詠唱で数秒掛かるためガンナーの手が必要なのだ。

実力派はレイザスも一緒だ。数十年前起こった戦争で活躍した戦士の中にレイザスがいたのだ。戦争を起こした魔王を倒したのもレイザス達だった。

その後は開拓ギルドに所属し、安穩とした生活を送っていた。仕事を引き受け護衛だの調査だの生物討伐とか様々な依頼を引き受け報酬で手に入れた金で暮らしてきた。

「今日もズバツと成功させよう。ギルドに行くぞ」

「うん!」

ソフィは元気のいい返事をして腰にボウガンと弓を挿した。

2

ギルドで仕事を引き受け、馬車で北の氷河を目指す。三日程で目的地に到達した。

仕事を淡々と済ませ帰りの準備をしている所だった。

辺りには広大な氷が河を流れていた。にしてもここはとても寒くこの環境に耐えられる生物はあまり居なかった。だからか依頼も簡単だった。

荷物をまとめていたレイザスがソフィに声をかけるが反応しなかった。様子がおかしい。

「どうした?ソフィ?」

「頭が.....いた.....い.....」

頭を抱えながら痛いと言うソフィはやがて氷河の一番大きな氷塊

を目指して突然走り出した。

「ちよ、うおい！！何処へ行く！！ソフィー！！」

やはり様子がおかしい、何度か呼ぶが、見向きもせず氷塊に向かうソフィの後を追っていく。

「ソフィ！ソフィ！くそっ！」

そういえばソフィの足はとても速かった。彼女の背中を追い続けていると。なぜか突然足を止めた。

氷塊のすぐそばに立ち尽くしている。やっと追いついたレイザスはこここの危険性に気付いた。

「しまった！！！」

「ソフィ！！！逃げろ！！！」

氷塊の辺りを白い大気が渦巻き始める。

光が氷塊に集まってくる。やがてこの辺りを大地震が襲った。

地響きが、ありえない程強くなっていた。

「ソフィッ！！！！！！！」

不意に、突然ソフィが意識を取り戻した。

「何、コレ……」

「逃げろ！！！！ソフィィ！！！！！」

その声は轟音にかき消された。

超巨大な氷塊が一瞬で大爆発した。それだけでなく爆発した氷塊の水が津波の様に襲いかかってくるのだ

「え？」

レイザスは魔法を唱え、ソフィを突き飛ばし安全な所へ避難させた。そしてレイザスは自分に結界魔法を唱えた後、大洪水の中に完全に呑まれた。

しばらくして、結界を解いたレイザスが氷塊があった所に、人が倒れているのを確認した。

ギンは暗闇の中、目を覚ました。

たしか、クラッドの中の大渦に飲み込まれた後……ここから意識が途切れていた。冷多に出会ってから何度も意識を失っている気がする。

途端に少女の声が聞こえた。

「レイザスさん、生きてるよ！」

誰だコイツ等、と目を開くと人間が自分を覗き込んでいた。まず思ったのが服装がこの世界の物ではない事だ。

ここは異世界か？

さつきから、じーっと色んな人の見物にされている。

とにかく分かる事はここは異世界、そしてとにかく

ヤバイという事

異世界に着いたという安堵で無く、危機感しか感じなかった。本当に着いているのかさえ、判らない。

覗き込んでくるのは見た事も無い様な人種達だった。耳が長い人や鼻の高い人、髪や服装など、しかも明らかになぜかガン飛ばしている男数名。

「おお、生きてたか」

と男が一人近寄ってくる。

髪は緑色、目に掛かるくらいの長さでその瞳はこの男のおおらかな性格が表されているようだ。

腰に剣を挿しており、白と黒の混じったローブを着用している。

節々に金の装飾品が着いていた。

「俺はレイザス・ヴァルシスタ、レイザスと呼んでくれ」

よろしく、と無邪気に笑う。しわの様な物があるため見た所、中年男性のようだ。

さ、出てった出てった。と野次馬どもを追い返し、レイザスはギンに聞いた。

「お前さん、何処から来た？」

「.....」

答えられなかった。

「言語が通じないのか？」

ギンは驚いていたのだ、なぜこの日本人とは離れた外見の男が日本語を話すのか。たつぷり迷ったあげくギンは口を開いた。

「いや...通じます」

「じゃあ、あんたはどっからきた？まるで空間転移魔法を使ってきたかの様だったぞ」

仕方が無くギンは今までの経緯と自分の名を言った。

「フム、確かに嘘を言っているようには見えんな。よし」

レイザスは地図を取り出すと。ギンをテーブルの椅子に座らせ地図を開いた。勿論ギンの知っている地図とはまったく違う地図だった。

「ここはデュルト大陸のジルの街だ」

西側の大陸の端の大きな街ジル、そしてここは開拓ギルドの医療室。ギルドの酒場はドアの向こう側にあるらしい。どつりで騒がしい喧噪がする訳だ。

「仕事中に氷河に転移してきたお前を拾ったんだ」

「ところで...人を捜してるんだっとな...」

と、何やら考えだした。

結論に至ったようでレイザスはこう切り出した。

「とりあえず此处で働いてみたらどうだ？金を稼ぐにはちょうどいいし出先で捜せるし...どうだ？」

なんでだろうか、その言葉に、同意した。

「ああ、そうする」

彼の顔がぱあっと明るくなった。

「おお本当か！」

「じゃあ．．．登録は明日にしといて今日は宿を手配しとくからゆつくりしてっくれ」

今日は疲れただろう、とレイザスは宿を手配してくれた。話は急だが、この人のやさしさがとてもうれしかった。

とりあえず、異世界での一夜目はぐっすり眠れるだろう。

レイザスはギンを宿に送った後、呟いた。

「しかし宮内か．．．聞いた事ある名前だ。まさかあいつじゃないよな」

#### 第4話 氷河に現れた異人（後書き）

前書きの詩は毎回書きます。新キャラが登場するたび考えます。今の所冷多の詩がお気に入りです。原稿中にはdumpの曲を聞きます。好きです。

## 第5話 仲間達と初仕事（前書き）

あたしは、あの空のほつき星になりたい。いつでも君の傍に飛んでいけるから。

ソフィ

登場人物

レイザス 緑色の髪を持つ魔法剣士、数十年前魔王を倒した戦士達の一人。

ソフィ

容姿可憐な狙撃手。

ガイ 身の丈程ある大剣を使いこなす剣士。性格は豪快で酒ばかり飲んでいいる。

ミレウ 冷静沈着な戦士、六種の武器を切り替えながら相手を翻弄する。



## 第5話 仲間達と初仕事

1

ギンの最初で最後の恋人

名前は日本人のものとは思えなかった。

その名は、ソフィ

ソフィの母は日本人だったが、外国で暮らしていた。日本に帰国し日本人の父と結婚し、子を授かったとき、母はソフィと名付けたのだ。

ヨーロッパの女性のごくありふれた名前だった。

その名前はヨーロッパの偉人女性に多い名前、お母さんは私が大きくなったら出世して欲しいという願いがこめられているのよ。

と、彼女からこんな話をよく聞いたものだ。

ギンは濡らした顔を拭きながら、昔彼女とした話を思い出していた。

今日は、朝からいい天気だ。

レイザスが手配してくれた宿の窓を開き、朝一番を堪能する。

この借りは必ずレイザスさんに返さなくちゃな。

レイザスとは昼に開拓ギルドの酒場で落ち合おうと約束した。まだ時間はあるそうなので、武器と防具の調達をしようとの方が良い、その為にレイザスは時間と、武具を買いえる程の金を少し分けてくれたのだ。

開拓ギルドの仕事は危険な仕事が多いので身を守る物と武器が必然だ。街の地図も知っておいた方が良くと宿の管理人のおばさんにもそういわれたのでいろんな所にいってみようという事にした。

宿を出るとまず市場が見える、昨日は夜だった為、一人一人いなか

ったが、かなりの賑わいを見せていた。

市場の商品は元の世界と同じ様な野菜や肉、魚などが並んでいた。とてもおいしそうな匂いがする。その匂いにつられベーコンと野菜を少し買った。

袋の中から美味しそうな匂いが漂っている。店のおばちゃんが親切に値切りしてくれたのだ。それと同時に武具が生産、加工されている武具屋がどこにあるのかという所も教えてもらった。

街の中央に大きなエントツのある建物が入房を見つけた。人の出入りが慌ただしい。鎧を着た騎士や大剣を背負う男や工房で働く男達、鉱石を荷車に入れて中に運び込む集団など様々だった。

手持ちの金で簡素な装備を買おうとギンも中に入り込んだ。

2

「よしっこれで値段は四万<sup>キアス</sup>Gだ！」

「たけえ！！」

胸を守る鎧、腕に付けるアーム、腰には革製のコイルを買おうとしたが。手持ちの金ではとても足りない。

工房のおっさんにとってはとても安値だったが、少し高すぎる。

「高いか？」

「もつと安くしてくれ！」

これ以上は安く出来ねえんだよな、と考え込むおっさんの目に写ったのはギンの着ているYシャツだった。ギンの元の世界で社会人が主に着用して仕事に向かうような服装だったが。おっさんはそれを見て一つ思いついた。

「良い事思いついたぜ、ちょっと待っててくれ、それとその服を脱いでくれ」

と武具に使う鉱石置場に向かった。

数分後、試着室で待たされていたギンは、上半身裸のまま椅子に腰掛けていた、工房の温度は鉄を溶かす程の温度の焼却炉があった

ので。工房の中はかなり蒸し暑い。工房で働く人々もこの熱さは曲者らしく工房内で着用している服には汗が滲んでいた。さっきのおっさんは上半身裸だったくらいだ。

試着室のドアが開く。

「完成したぞ！」

と、さっきのおっさんがやってきた。手には鎧の様な物を持っていた。

「それ、俺のシャツじゃねーか!!！」

ギンのYシャツは変わり果てた姿になっていた。

「おう！加工したぞ！」

Yシャツに鉄板を覆わせ、シャツの布地を痛めないように革を縫い込んである、各部の急所には固そうな鉄網やいろんな装飾がしてあった。

「でも、元のシャツ……」

「ああ、そこは大丈夫だ、お前の服をベースにして鎧にしてみた。

元の服はここにあるぜ！」

と、さっきまで着ていたYシャツを出す。

びびった、本当に大丈夫だったか、俺のシャツ……

「さて、まず、この鎧を試着してくれ」

この鎧は、とても軽く、着ても動きには問題はない。おっさんの腕前は想像以上で見た目よりも性能がよかった。

「おお!!！」

「気に入ってくれたか！」

「ところで……値段は？」

「ん？レシピにもねえからタダでいいぜ！」

「マジか!!！」

ありがとな、と、感謝の意を表すギンだったがおっさんは加減無くギンの肩をバンバンと叩いた。

「いいってことよ!!！」

「ところで武器も買いたいんだけど．．．．．」  
それなら工房のカウンターで買ってつてくれと、言われた。

レシピにはいろんな種類の武器があった。

短剣から、身の丈程ある槍、弓にボウガン、持ち歩ける大砲から魔法用の杖、魔法剣など様々な物があった。

少なくとも俺が使えるそうなのは身の丈の半分程の剣ぐらいだ。

そうして購入したのは刃渡り一メートル程のミスリル製のソードにした。ついでに身を軽くする魔法加工を施したマントも買った。

「毎度！！また来てくれよな！」

工房からであると、冷たい風が頬をかすめた。

「にしても熱かったな．．．．」

工房の熱気はこもる様な感じでとても熱かった。マントを着て外を歩いていると。ギンとはある噂話を小耳に挟んだ。

「あの話きいたか？」

「ああ、ゲルド盗賊がコルゴ街を襲ったんだろ．．．物騒だねえ．．．」

「．

「なんでも黒魔導士集団が街を焼き払ったとか」

「ここを襲われたらやばいぞ。コルゴはここからたった数キロだし．

．．．」

どうやらこの街は今不穏な空気に包まれているようだ。黒魔導士だのなんだが、ここも危ないだとか。

とにかくギルドに行ったらレイザさんに詳しく聞いておく事にしよう、と、ギンは開拓ギルドに向かった。

3

酒場に入るとレイザスが一つのテーブルに座っていた。ギルドの喧噪に紛れギンはとりあえずレイザスの居るテーブルに向かう、そのテーブルにはレイザス以外にも仲間パーティと思われる人が数名座っていた。

レイザスに挨拶をすると、仲間達がギンに視線を向ける。とりあえずレイザスはギンを紹介した。

「こいつは、新入りの宮内ギン、訳あって此処に……」

「みんなっ!! おはようっ!!」

とレイザスの声を遮りソフィが元気よくギン達の間に入ってくる。ギンは目を見開いた。

茶色の綺麗な髪、卵のような肌、大きな瞳。

これは間違いない、三年前にこの異世界に消えた、ギンの大切な恋人。

思わず、大声を出していた。

「ソフィ?!?!」

どうした?と酒場中がギンに注目していた。レイザスもその仲間も驚いてギンを見る。

「やっと……会えた……」

ギンの事情を知っているレイザスは冷静に、驚くギンを落ち着けさせるため説明する。

「落ち着け! お前の捜し人じゃないぞ」

「何?……このひと?」

ソフィは勿論訳も判らず、視線を行ったり来たりしている。

ギンはレイザスの説明を受けると、落ち着きを取り戻したように見えた。

レイザスは二十年前、道に捨てられた赤ん坊、ソフィを拾い今までずっとこの街で育ててきたという。

ソフィもギンの事は知らないという。

という事は容姿が同じだけで、この人物はギンの知っているソフィとは別人の人間とでも言うのだろうか。

とにかく話は別の話題に移った。テーブルに座る仲間達の自己紹介でもしようか、という事だ。

まず、立ち上がったのは大柄な男だった。背中には大きな大剣を背負っている。

「オレの名前は、ガイ・レイサだ。この大剣でいろんな獲物を相手してきたあ。よろしくなあ!!」

うーいい、ヒックと、だらし無い態度を取っている。この男、酔っているのか陽気だ。酒の入ったグラスを飲み干して振り回していた。

この豪快な性格は外見にもにじみ出ている。質の固そうな黒髪は無造作にそろえられていて、黒の瞳は真っ直ぐな意思を表していた。何よりも目を張るのは無骨で丈夫そうな鎧を着ている所だ。

ギンの服の様な鎧とは違い、騎士が装備するようなガツチリした防具だった。

ガイが座ると、その横にいた人物はゆっくりと立ち上がった。この人物はギンの様な人種とは違い耳が尖るように長かった。

「ミレウ・ヴァン・ドラグンだ。ここの依頼は厳しい・・・せいぜい頑張るんだな」

よろしくと返すギンにミレウは冷たい視線をこちらに向けてくる。この人は愛想が悪いのだろう。

次に立ち上がったのは、ソフィだった。

「あたしはソフィ。武器はボウガンと弓！よろしくねっ!」

背負っている弓とボウガンを指差すソフィ。とても明るい性格はギンの知るソフィとはやはり違った。

そしてレイザス、立ち上がりずに話し始める。

「俺はレイザスだ、武器は剣だが魔法も使えるから、魔法剣士だ」  
するとたちまち皆の視線はギンに向けられる。

「宮内ギンです。武器は剣。よろしく」

ギンの自己紹介が終わると、レイザスはこう告げた。

「皆、久しぶりに集まってもらったのは他でもない、噂で聞いた事

ぐらいあるだろうが、ゲルド盗賊の討伐作戦参加命令が俺達名指しで来た」

「やっと王国は手を付け始めたんだな」

ゲルドは他の奴らとは違うからな。と、ミレウが加える。

「ギンには急だとは思うが、依頼はデュルト平原にあると思われる奴らの拠点を叩いて欲しいとの事だ」

「承諾してもいいか？」

念の為全員に確認するレイザスに仲間達は頷いた、無論、ギンもだ。

そうして打ち合わせは終わり、解散となる、作戦は二日後だそうで、明日、日の出とともに集合するとレイザスは告げた。

ギンはとりあえずギルドの登録を済ませると、酒場を出て行った。

5

ここはデュルト平原の素朴な建物の中、黒いローブを纏った集団が魔法陣を囲み、全員が不思議な魔法を唱えていた。

「まだ、完成しないか……」

黒い仮面をかぶった男がその様子を見下ろしている。

「すみません、尽力は尽くしていますが……」

大柄な男が仮面の男の隣にくる。

「そうか……」

「早く、目覚めさせてくれ……」

私を……

## 第5話 仲間達と初仕事（後書き）

おもしろい！！と思ったならコメント下さい、必ず拝見いたします。  
そしてこれからはゲルド盗賊篇です。がんばって構想を練っています  
すので見てやって下さいwww



第6話 仮面の脅威（前書き）

邪魔する敵は真っ二つだ。

ガイ

登場人物

仮面の男      ギンに対し意味深な言葉を投げかけてくる男

## 第6話 仮面の脅威

1

草食生物の引く荷車に揺られている。

デュルト平原に潜むゲルド盗賊討伐の依頼の目的地に向かったのんびりと向かっている所だ。

「にしても暇だなあ．．．なんか本ない？ミレウ」  
「無いな．．．」

冷徹に切り返すミレウに、ガイが食らい付いた。

「あるだろ？その物入れの袋に．．．」

「ああ．．．ある」

「あんのかよっ！！じゃ適当に貸してくれよ」

「無いな．．．」

「はっ？！！！なんつった？！」

「お前に貸す本は無いと言ってるんだ．．．」

ミレウは袋から本を取り出し、ギンに差し出した。

「貸してやる．．．読んでみる．．．」

「おお．．．サンキュ」

「ミレウウウ！！！！てめええ！！！ケンカ売ってんのかあ！！！」  
立ち上がって背に背負っている大剣に手をのばすガイ。

「．．．．．ああ」

「てめえは！！！」

「殺す．．．．．」

武器を抜く二人にギンが慌てて止めに入る。

「おいおい！二人とも落ち着け！」

「だってよお、こいつギンには優しいけどオレにはムカツク事ばっか言っただぜ！！殺す！」

ミレウに向かって中指を立てるガイ、溜め息を吐き出すギン。

さっきからずっとガイとミレウの喧嘩の止め役になっているギン、

そういえば二人の喧嘩の仲裁にレイザスとソフィは関わって来ない。さつきレイザスに「二人の事、頼んだよ。」とか言われた途端に二人の喧嘩が始まったのだ。

これってアレか．．．さつきから俺は完全にハメられている．．．

「やってられつか!!」

喧嘩する二人を放っておいてミレウが貸してくれた本を読む事にした。

内容はこの世界の歴史。

魔法の誕生、エルフが現れるとか、ペラペラと飛ばし読みしているとこんな物が目に入った。

人類の一時全滅。

「人間達は魔力や資源を浪費し、それを求めた人間同士の戦争の末、二万年前に全ての人間がこの世界から消えた。人類は何らかの形で復活したが、どうやって復活したかは不明である。

人類がいたという事を証明するものはこの世界各地に遺された旧文明の遺跡で、そこから空間転移装置を多数発見され、その機械は古代文字で、

クラッド。

を意味するものである。その装置については使用方法もわからず、今も研究がされている。」

と言った記事だった。

「クラッド?」

クラッドはギンが移動してきた兵器で、あれは確か遺伝子改良された人間だけが使えるらしい．．．

という事は俺は遺伝子改良された人間だということのか?

山の様に疑問符がギンの中に浮かんだ。

ただ、それを考えても答えは出て来ないので、とりあえず頭の中にしまっておく事にした。

デュルト平原の一つ前の山岳を抜けると、目の前には緑の地平線が広がっていた。

ここが目的地のデュルト平原である。何もかもどこからでも見渡せる程目に残るものは少なかった。

「で？どこにあるんだあ？奴等の拠点つてのは・・・」

「確か・・・平原のどこからしいが・・・」

辺りを見渡すが、何も無い。あるのは野生の草食生物のみ。のんきに草ばかり食べている。

「おいおい？！まさかの手違いか？」

例えギルドの管理する依頼でも、手違いはある。こうなった場合依頼はとりあえず保留扱いされ、再確認ののち間違いを発見して、もう一度依頼を貼り出すのだが。

今回は普通の依頼ではなく正式な王国の依頼なのだ。手違いなど無い筈だ。

どうしようか、と迷うレイザスに口数の少ないミレウが珍しく口を開いた。

「いたぞ・・・奴等、カモフラージュ視覚妨害魔法をしている・・・」

「そつかあ！それで、何処にいるか判る？ミレウ！」

あつちだ、と駆け出そうとするミレウとソフィをレイザスが制した。

「待て！二人とも！！そいつは罠だ！！！」

レイザスの言う通り、盗賊達が現れた。ざっと三十人だ。一人一人黒い服を纏い剣を手にギン達に洪水の様に襲いかかってきた。

短剣を持った盗賊が先頭きつて、レイザスに飛びかかった。甲高い声が響く。

「もらったあつ！！！」

「甘い！」

盗賊の剣先が空を斬った。レイザスは僅かに身体を反らし、避け

ただ。

それから隙も与えさせず、レイザスの一撃で、盗賊は倒れた。

「オラオラ！！！！かかってこいや雑魚どもがあっ！！」

ガイは身の丈程ある、巨大な剣を構える。そして身体の一部の様に大きな剣を軽々しく振り回すと、盗賊達はあっけなく吹っ飛んだ。

「コイツ等、強ええ．．．！！」

盗賊の一人が、彼らの実力に驚いているようだ。

まるで、諦めるように数名がギンやソフィに襲いかかる。ギンがとっさに応戦しようとしたが、その盗賊は何かに絡めとられたように、地面にたたき落とされた。

それはミレウの鞭だった。たたき落とされた数名の盗賊は立ち上がるとミレウに襲いかかった。

ミレウはその身に大量の武器を所持していた。そのなかの一つの斧を取り出すと重そうな斧を片手で振り抜き、吹き飛んだ盗賊達ももういちど立ち上がるうとする前に、斧を戻し今度は魔法の杖を引き抜き、唱えた。

「炎系魔法！！炎槍！！」  
ファイアランス

ボワ、と炎が盗賊達を包み、燃え盛る炎の中、彼らは力尽きた。

まだ五人は残っている。ギンは剣を構えつつその瞬発力で間合いを詰めた。

「だらあっ！！」

敵の攻撃を防ぎ、そこから体勢を崩した敵を斬るとそいつはあっけなく地面に倒れた。

そこから二人を撃破し残りを倒そうと構えた所で、そいつらはソフィの弾に撃たれ、倒れた。

「おしまい！てか、ギン！お前やるなあ！新人なのに！」

すげえや！！とギンの肩を叩くガイ。その顔には皮肉のような物ではなく純粹な笑顔があった。

「腕には自信があつてな。お前もよく大きな剣を簡単に振り回せるよな」

「オレも自信あり、だ!!」  
と、意気投合する二人をよそにレイザスが何処かを指差す。  
「あれを見る、視覚妨害魔法が解けた」  
目の前の平原の一部分だった景色がねじ曲がっていき、やがて木造の素朴な建物が見えてきた。  
そこに一人、男が立ちはだかっていた。

3

照りつける太陽、視覚妨害魔法が解かれ不気味なボロ屋が現れたが、その建物の前に黒い鎧を着た男が、立ちふさがった。  
黒いマント、黒い鎧、黒い剣、黒い仮面を装備している。  
恐ろしい程不気味な気迫が、全員を包み込んだ。

「コッコッコッ!!!!??」「LLLLL」  
こいつはヤバイ、この場に居た全員もそう感じたのか一歩引き下がり、警戒した。

冷や汗が、額を滑り落ちる。

この男は何もしてこないが、常に首に手をかけられている様な感覚がする。喉が乾き、身体の中の水分が大量に吸い上げられる様な程の汗が出ていた。

「宮内……吟……」

「!!!!!!」

突然、仮面の男が、ギンの背後に居て、ギンの名を読み上げた。  
馬鹿な。

集中力は全て遠くに居たこの男に注いでいた筈だった。  
見逃す訳など無かった。

それなのに、いきなり背後に居たのだ。

「待っていたぞ……」

喉が乾きついているため声も出ない。

動く事も出来なかった。

絶対、殺される

この男の気配に押しつぶされ、意識が一瞬遠のく。  
気がつけば、男は消えていた。その安心感と開放感につられ、思  
わず膝をついていた。

あいつは、一体何なのだろうか。

## 第6話 仮面の脅威（後書き）

ミレイに渡された本は異世界語で書かれています。ギンはそれを読めません。都合によりカットしましたが、ギンは超絶的なほど語学を理解、解読が速い男なので知らない語学もちょっと勉強すれば基礎ぐらいは判るようになってます。おかしいだろ！！と思った方すいません。

そのとおりギンはおかしいぐらいすごいです。でもアホです。



第7話 六人の黒魔導士（前書き）

どうせ自動で最後は来る・・・永遠という言葉は幻想でしかないの  
だから・・・

ミレウ

## 第7話 六人の黒魔導士

1

「大丈夫か？ギン！！」

さっきまでギンの背後にいた男が消えたと同時に、ギンは地面に膝を突いていた。

吐き気がこみ上げてくる、それを我慢しながらギンは立ち上がった。

「大丈夫・・・だ」

なんとか体調は良くなった。

「あいつ・・・何だったんだ？」

「気配は完全に消えたが・・・」

「それに・・・あいつはギンの名前を言ってたよね・・・」

「待っていた・・・？」

ミレウやソフィ達が考え込むが、短気なガイがこの話題を止めた。

「あーもう！！考えても考えてもますます意味不明になるからこの話辞めにして、仕事終わらせるぞ」

視覚妨害魔法が解け見えるようになった盗賊達の拠点を指指しすガイに皆は同意した。

仮面の男の言動からするときつとあの男はまたギンの前に現れるだろう。

とにかくこの疑問から離れておく事にした。

ガラスが突然割れる。何者かの仕業だ。

現れたのは盗賊の拠点の様な大きなボロ屋敷、正面から突破するのは危険極まりないため、ソフィの提案で裏口の窓から入り込むのと正面突破と別れる事になった。裏口から攻めるのはソフィとギンの二人、あとの三人は正面突破するという作戦だった。

この依頼にはサブ目的が追加されている。ゲルド盗賊に盗まれた

魔法書を取り返すということだ、このサブ依頼は基本無視していいのだがこのサブ依頼を達成すると報酬料が三割追加されるのでサブ依頼も一緒に達成する人は意外に多い、本依頼が無理だと感じたらサブ依頼だけを達成して帰ってもサブ依頼単体の報酬は貰えるので途中で帰る人は多い。

「よいしょつと」

割れた窓から、ソフィがゆっくりと侵入し、人が居ないのを確認しながら進む、安全を確認すると窓の外に居るギンを呼ぶ。

「大丈夫だよ、入ってきて」

差し伸べられたソフィの手を取りギンも狭い窓から中に入る。

薄暗い不気味な部屋だ。外の光は侵入してきた窓からしか無いらしく、とにかく暗い。

「ここは物置か．．．？」

僅かに見えるのは必要ないと思える道具諸々、ここには探し物の魔法書は無さそうだ。

部屋から出ようとした時、罵声が響いた。

「敵だあああ！！！！」

レイザ達と盗賊達が交戦を始めたようだ、どうやら作戦は始まったようだ。

盗賊達の注意はレイザ達に注がれている、魔法書を探すにはいいチャンスだ。

「よし！とりあえず出るぞ！」

「うん！」

物置から出る二人を、何者かがのぞいていた。

「泳がせておいて正解だったな．．．」

「本当だなああ。じゃああ、あの二人は俺に任せといてよあ」

「そうか、我々は儀式を続けさせよう、二人は任せた」

「うおらっ!!!」

ガイの大剣が盗賊の手下達を吹き飛ばしている。

「くそ!!! 雑魚ばっか相手になりやしねえ!!! 奴等の頭領と黒魔導士六人はどこだッ!!!」

屋敷の中には確かに敵ばかりだったが、サブ依頼のリストにあった黒魔導士六名がなかなか見つからない。ガイは倒した手下に掴み掛かった。

「お前等の頭領と黒魔導士共はどこにいる?! 言わねえと真っ二つになるぜ!!!」

その手下は怯えながらも吐いた。

「お.....の.....しろ.....」

「あああ?!?!」

何言っただんだ!!!、と更に脅しを掛けようとしたがガイは自分の背後に何かが迫りくる気配に気付いた。

魔法陣がガイの足下に現れた。ガイはそれに気付くが遅かった。

黒魔導士の基本的な魔法、黒魔法陣だ。この魔法陣にかかった者は、呪いを与えられ、使用者によれば死に至る程の苦痛を味わうという。

「ぐああ!!!」

ガイはまともに黒魔法を喰らい声をあげたが、その魔法陣は一瞬にして破壊された。

まともに喰らった筈だが、ガイは何事も無かった様な顔をしていた。

「そこにいるんだろ! わかってるぜ、黒魔導士さん」

ガイは屋敷の奥の扉へと剣を向ける。

「よく、気がついたな」

扉が開くと、そこに男が居た。どうやら、黒魔導士の一人の様だ。黒い服装に剣を持っていた。

「へえ、魔法剣士ねえ」

「ああ、黒魔法を使う剣士だ」

「卑怯な奴だな、いきなり襲いかかるなんて」

「卑怯結構、私は盗賊だ」

ガイは怒りをたぎらせて罵声を上げた。

「気にいらねえんだよ！！そうやって簡単に人の命を奪おうとするのが！！！外道どもが！！！！」

「外道結構、だが、気に入らないのは我々の台詞だ！！私が手により死んでいくがいい！！」

「かかってきやがれ！！」

ガイは身の丈程ある巨大な大剣を構えながら、走り出した。

3

「魔法の本見つからないな」

書斎を見つけ、そこでしばらく魔法書を探していたギンとソフィだったがなかなか見つからない、ソフィはここには無いのかと諦めかけていた。

「ああー、喉乾いちやった、飲み物ある？ギン」

「無いよ、にしても俺も喉乾いてきた」

と、無駄話をしながら目的の本を探すギン達。

「てか奪われた魔法書ってどんな内容なんだ？」

「さあ、あたしにはよくわからないけど、王国の本って事はやっぱり重要な本なのかなあ」

「だいたい魔法書って言っても、どんな本かわかんねえし見つける事自体無理だろ」

「魔法書なら魔力を感じる筈よ。それで分かる筈なんだけど」

取り出した本を元に戻しながら、魔力ねえ、と呟くギンにソフィが眉を曲げた。

「ギンって不思議ね」

「ん？なんでだ？」

「だって魔法の事全然知らないじゃない、どこでも普及しているの

に」

「いや、なんか全く違う環境で暮らしてたもんだから魔法なんて知らなかっただけ・・・」

そういえばソフィ達にはギンが元暮らしていた世界やクラッドの事は打ち明けていない。

それに初対面の出来事もソフィは綺麗さっぱり忘れている。

ギンの知っているソフィとは性格が異なるソフィ。そんな疑問も流されていっていた。

ギンの知っている方のソフィはこの世界には本当にいるのか。ギンの暮らしていた地球の崩壊を止める術はあるのか。

それとも俺はただ騙されているだけかもしれない。

知床冷多に。

4

結局、書斎のどこを探しても、魔法書と思われる物など無いと悟った。

それと同時にさっきから何者かに後をつけられている気がする。

魔力を感じる事は、魔力についてはよく分からないが、あの仮面の男と接してからはレイザスやミレウの魔力を感じる事が出来るようになった。

ソフィは感じていないようだ。

だが、ギンはしつこい程の魔力が発せられている事を、感じ取っていた。

どこに敵が潜んでいるかは分からないが、ギンは自分のミスリルソードに常に手を置いていた。

予感、やはり的中した。

ミスリルソードを抜き、身構えた。

「ギン？どうしたの？」

「敵だ！！さっきから俺等の後をつけてた」

書斎を飾っていた物置の鎧が、ガシャガシャと動き出した。どう

やらこの鎧自体、物置ではなく敵だったようだ。

「よおおおくうう、お気づきになあつたあ」

ものすごいんびりとした口調で、鎧はギンに斬り掛かった。

剣閃が閃いたと同時に、ギンはその剣閃をミスリルソードで受け止めようとしたが、その剣から不気味な魔力を感じたためギンはとつさの判断でかるうじて避けた。

「魔法を纏った剣?!?!」

鎧の男が剣を振り抜くと、空気中で、振り抜いた所が爆発した。

「左様わたすも黒魔導士の六人の一人、マルマルにごさあるよしなに」

「黒魔導士だとっ?!?!」

わずかに舌打ちをするギン、黒魔導士といえば呪いの魔法を得意とする奴等だ、相手にするのは危険極まりないが、ここにはソフィがいる。

守らなければ、ソフィが危険だ。

「ソフィ!!!こいつは俺が倒す!!!お前はさがってる!!!」

マルマルが再度斬り掛かってくる、その剣を今度は受け止めた。剣と剣が衝突し、火花が散る。

そして、ギンの体が爆発を起こした。

「油断すたれえ、勇者さん」

「油断したのは、どっちだ!!!」

爆発を受けても、ギンは倒れなかった。体勢を整えながらマルマルの左肩を斬りつけた。

「おおっ?!?!」

鎧の無い部分を効いたらしく、マルマルは血が出てくる肩を押さえながら、怯んだ。

「こいつう!!!やるじゃんよおおお!!!弱そうナリしてる癖にい!!!」

「へっ、喚くんじゃねーよ、弱く見えるぜ」

「大丈夫!?ギン」

ソフィが叫んだ。どうやら心配しているようだ。

「ああ．．．さがつててくれ．．．心配すんな！」

さっきの爆発を受け、悲鳴を上げる体を無理矢理押さえつつ、ギンは元気に返事を返した。



## 第7話 六人の黒魔導士（後書き）

この世界の金の呼び方はGと書いて「ギアス」、  
「ギル」と古代ローマの「アス」をくっつけただけです。  
テキストに決めました。スイマセン。  
1ギアスが日本円で10円と言う事になります。  
そして次話は六人の黒魔導士対ギン達の激戦に続きそうです。

第8話 本当の力(前書き)

無理矢理目覚めさせやがって。  
ギン

## 第8話 本当の力

1

書斎の中、剣閃が響く、剣を振る時の轟音、爆発音が部屋中に響いていた。

「ハアー．．．ハア．．．ハア．．．」

さつきからずっとマルマルの剣を避けてばかりのギンに苛ついているマルマル。

「さつきからあ、避けてはつかでつまらないじゃない」

「ハア．．．ハア．．．悪いな、あんた、強いな．．．」

「そいじゃあ、ドドメだ!!!」

マルマルは大きく振りかぶり、ギンの頭を狙って斬り掛かってくる。

はつきり言って魔法剣士は手強すぎる、普通の魔導士なら接近戦に持ち込めばかなり有利になるのだが、魔法剣士は接近攻撃にも優れていていくら魔法攻撃を避けて相手の懐に潜り込んでも接近戦で距離をつけられ遠距離の魔法攻撃を使ってくる。

しかもマルマルは剣撃と厄介な魔法を組み合わせた一撃を繰り出してくるため、戦略の組み立てが非常に難しい相手である。

現に、剣撃と魔法を組み合わせた攻撃を何度か喰らっていて、ギンの体は限界を訴えていた。動くたびに体中が不気味な悲鳴を訴えていた。

「やべ．．．．．!!!」

「ギン．．．!!!」

もう、動けなかった。今度は避けられない。

その時、流れる時間が、とても、酷く遅くなったように感じた。そして、ギンの手がマルマルの本気の剣を受け止めていた。

「なんだと???!! 私わたすの剣を片手で．．．!!?」

マルマルの剣をはじき返すギン、不思議と、力が湧き上がってきた。

た。

「うわっ!! どういうことだぁ?!」

何か不気味な物をギンの中から感じる。それは魔力の様な類とは他の物だった。並々ならぬ気迫がマルマルを潰そうとしているのだ。「なんだよおそれええ!!」

青い闘気がギンの体中を巡っていた。まるで炎の様に。

その闘気に完全に押し潰され、マルマルは自棄を起こしたかの様に突進した。

「死ねえええぐぞがああ」

ギンにもう一度斬り掛かりつつマルマルは魔法を唱えた。

「最大黒魔法おお、黒爆岩ブラックメテオ!!!」

魔法を剣に纏わせ、今迄よりも大きな魔法をかけた、最大魔力での一撃である。

勿論マルマルにも被害が及ぶ程の大爆発が書齋中に響いた。

書齋の本が吹き飛んだ。

「きゃあああっ!!!」

書齋の端に居たソフィも爆風に飛ばされ、書齋の外の廊下に放り出された。ただ怪我はしていない。

「どうした? ソフィ!!!」

屋敷中を揺るがす大爆発を聞きつけたミレウがソフィの元にやってくる。

「ソフィ」

「ミレウ・・・ギンが」

「何!?!」

爆煙が書齋中に漂っていて、視界を阻まれる、だが、煙の中に二人の影があった。

「ギン!!!」

返事はこない。煙が晴れるとその中にギンとマルマルが立っていた。

「ギン!!! 無事か!!!」

武器を抜くミレイ、手に取った弓でギンの反対側にいた男に狙いを定める。鎧が殆ど剥がれたマルマルはよろよろと剣を構えるていたが、対照的にギンは無傷だった。あの爆炎をまともに受けた筈だった。

なぜギンに攻撃した筈のマルマルが逆にポロポロになっているのか、状況がよく分からなかった。

ギンがあんな大爆発を起こせる筈ないし、あれは黒魔法、マルマルが発動した物だ。

「まさか．．．魔力反転を使ったというのか?!」

二十年前現れた彼の魔王が使っていたという大技、魔力反転。

相手が体から放った魔法そのものを反転させそのまま相手に跳ね返す。魔法の道を極めた者のみが扱えるという超高度な大技だ。

習得したと思えるのはその魔王のみ、習得しようとした者は何人もいたが普通の人間には不可能といわれる。

それ程膨大な知識と技術が必要なのだ、習得するのは不可能だと言われる点の一つ、魔力を使用しないという事だ。

どんな魔法にも魔導士の中にある力の源である魔力は引き出され、それが形となって放出され自在に操る事ができる。

それが、魔力反転は魔力を何も使わず、相手の魔力を利用する術なのだ。

もともと自身の中の魔力を引き出すという事は、その魔力を引き出し操る事で初めて魔法として生成されるのだ。だがその力に気付かず、またはもともとその力の無い者がいたりする。

魔力反転とは相手の魔力を知り尽くさなければ扱えない術なのだ。勿論知り尽くす事など不可能だった。

だが、ギンは相手の魔力を利用し、反転させたのだ。

ミレウはその様子を見た訳ではないが、ギンとマルマルの様子を見れば、一目瞭然だった。

「ハアア、ハアア、まさか．．．ほんたにおう本当に、魔力反転だどあ?」

自分の最大魔力をその身に受けたマルマルは、よろけながらも剣

を振り下ろした。

それはギンの剣に当たった所で折れた。

「俺の．．．勝ちだ」

そう宣言すると、マルマルはその場から、ゆっくりと倒れた。

ギンはマルマルに勝った。

「ギン．．．お前の力は．．．何なんだ」

マルマルは確かにギンが魔力反転を使ったと言っていた。

ギンが魔力反転を使ったというならギンはただ者ではない、だが、今回はとにかくギンの手柄だ。

2

「爆発．．．あれは何だったんだ？」

レイザスは手下共を倒しながら進んでいる。

「ガイがやったとか．．．」

と適当な妄想で済ませておいて先へ進むと、盗賊達がまた現れた。

「またか．．．ん!？」

魔力を感じる、それも二人ほどの、という事はこの先に黒魔導士が居るといふ事だ。

「敵か．．．何のようだ」

何者かの声だ。

「何の用って、依頼を受けてやってきたもんだ、よろしく」

「なるほど、私はゲルド盗賊の頭領．．．シリユウだ」

それはレイザスの真上に立っていた。そう、天井に立っているのだ。

「仮面を被った変な男に会わなかったか？」

シリユウは、天井から飛び降り、空中で回転してレイザスの目の前に降りてきた。

「ああ．．．屋敷の前に立っていて、それでどこかに消えた」

「なるほど．．．困ったな」

「ところで、シリユウさん．．．俺の用件を聞いてくれ」

「んん？何だ？」

「一間置いてから、魔法剣を抜くレイザス。

「おとなしく捕まってくれ」

「成る程．．．そいつは残念だ」

「そうして、この屋敷に二度目の大爆発が起こった。」

## 第8話 本当の力（後書き）

そういえば、いつも後書きには関係ない事ばかり書いてます。  
はっ！！これも関係ない。



## 第9話 手下達の真実（前書き）

オレは救いたかった、オレが出来なかった事をもっとして欲しいから。

ガイ

登場人物

シリユウ

少数派だったゲルド盗賊を束ねる頭領。

デルミル

六人の黒魔導士の一人

## 第9話 手下達の真実

1

屋敷が揺れる、これで二回目だ。しかも一度目よりも激しかった。「うおー！」

階段で現れた盗賊の手下と戦っていたガイは、バランスを崩して地味に階段を転がり落ちた。

「いたた．．．何だつてんだよ．．．」

黒いボロ布を纏った盗賊の手下が、寝転がるガイに一撃しようと飛び込んでくる。

ガイは慌てて立ち上がり盗賊の攻撃を大剣で防ぐ。

「おこぼれにあずかるうなんて十年早えんだよ雑魚がー！」

大剣を持ち上げ、右足に持つていきそこから最大限に力を込め、怯む盗賊達を豪快に吹き飛ばした。

「オライ、どうしたア！！！！かかってこいよコラア！！！！ビビってんのか？！！」

罵声に似た挑発をかけると、かけられた男はため息をついた。長身の魔法剣士、黒魔導士の一人だ。手下達と戦うガイとはあえて戦わず、高見の見物をしていた。

「やれやれ、奴隷共もやられたから、相手でもしょうか．．．」

奴隷という一言に眉間にシワを寄せるガイ、奴隷というのはさっきからガイが吹き飛ばしていた手下達の事だろうか。

「奴隷！？」

「ああ、こいつらはゴルゴ街にいた奴隷達だ。クク、うつ状態だった彼らを洗脳したのさ」

ゴルゴ街というのは、奴隷商や闇市が盛んな街で、数日前にゲルド盗賊が焼き払った街だった。そういえばゲルド盗賊は闇組織の中でも上位クラスの少人数の賊だった筈だ。

「そういうことか．．．この手下達は奴隷だったのか．．．」

ガイの頭の中を昔の記憶が通り過ぎる、忘れた筈の記憶が、この手下達から感じたのは既視感<sup>デジャヴ</sup>だった。思わずあの出来事が鮮明に蘇る、ガイはそれを振りほどく様に首を振った。

「お前．．．最低だな」

「何だと？」

ガイの怒りは頂点まで達していた。怒りのあまり目の前がチカチカしてくる。

「お前等には、奴隷達の感情が伝わらないのか！！！！」

「コイツ等！！オレを襲った時哀しそうな顔をしてた！！助けて欲しいって！！こんな事したくないって！！」

「ほう、コイツ等が？お前はどうかやら経験があるようだな．．．面白いな」

冷酷な笑みを浮かべる黒魔導士の一人。

「しかも、こいつらには峰打ちしかしていないのは．．．同情のつもりか？」

ガイは手下達を刃では斬らなかつた、ずっと剣の腹で吹き飛ばしたり、蹴り飛ばしたり、けして殺しはしなかつた、彼らの意識を失わせる程度の攻撃をしていたのだ。

ガイは彼らを真に救いたかつたのだ、だからガイは奴隷達の代わりに奴等を黒魔導士達を倒そうと決めていた。

「ああ、同情だ！！本気でお前を倒す！！」

ガイは剣を担ぎ走り出した、今回こそこいつをたたっ斬ってやる

と。  
階段を駆け上がり、魔法剣士のもとに突進して大剣を振りかざして。

「うおおおおお！！！！」

大剣は空を割り地面に深々とめり込んだ。振動が大剣を伝わって手にまで痛みが伝わった。じりじりと来る痛みを押し殺しながらめり込んだ剣を引き抜いてそのまま左足を軸にして回転しながら生んだ遠心力を利用して相手を斬りつける。

振り回した大剣は相手の手前で鈍い音と共に弾かれた。  
火花が舞い散る。

「やるな！お前の名は？」

魔法剣士の黒魔導士は一步後ろに引き離れながら聞いた。

「オレの名前はガイだ！」

「そうか．．．私はデルミル、我が盗賊の黒魔導士のなかでは二番目に強いという事だ」

ガイの剣を余裕で避けながら、デルミルは自己紹介をしていた。  
そして、一方に攻撃しないデルミルは、魔力を高め始めた。

「ガイか．．．では、私も本気を出そう」

「うわっ！！！！！！！！！！」

そうして、デルミルが黒魔法を詠唱すると、ガイは暗黒に包まれた。

2

さっきの衝撃の元凶である盗賊の頭領であるシリユウとレイザス、その二人は土煙の中、驚く程平然としていた。

「そういえば、前より急に手下達が増えたじゃないか、どういふことだ！？」

「ああ街を襲った時に居た奴隷達を連れてきたんだ、これも一緒にな」

取り出したのは不気味な茶色の柄をした分厚い本だった。

「魔法書．．．．」

「そうだ．．．禁呪魔法のな」

「禁呪だどっ？！！！！」

レイザスは目を見開いた、禁呪とは無論禁止された魔法を称した者で、一つの禁呪魔法で山ひとつ吹き飛ばせる程の力を持っている。多くは知らないが、とにかく禁呪は危険だ。

「この魔法書は、伝説の悪魔達を召還させる代物だ」

「悪魔．．．？」

「そう、悪魔だ。こいつを召還し、手始めに王国を襲う」

レイザスはシリユウの腐った眼光を見て、決心した。

「やはり、お前は野放しにはしておけないな．．．」

「だったら、どうするんだ？愛する親友、レイザスよ」

レイザスは唇を噛んだ、何故にこの男はここまで堕ちたのか。

「お前は．．．やりすぎた．．．もうよせ、辞めるんだ」

その一言に冷静なシリユウは罵声を上げた。

「その一言は私があの時言った筈だ！！貴様がこんな事をしなければこんな事は起きなかつた！！！！」

シリユウはレイザスとの過去を思い浮かべながら、それを引き裂く様に、突進した。

レイザスの剣とシリユウの魔法弾が激突する。

魔法が辺り一面で花火の様に爆発した。

なんとか魔法で応戦するレイザスの体をシリユウの魔法槍が貫いた。

「ぐっ！！」

そこから間髪無く、シリユウの魔法がレイザスを捉えた。

吹き飛んだレイザスの目には、残酷なシリユウの眼光が写っていた。

手を取り合ってどんな苦難にもいつも一緒に立ち向かったかけがえない親友。

その絆は、今、完全に断ち切られた。

## 第9話 手下達の真実（後書き）

詩はキャラクター達の過去や感情を写し出しています、やがて詩に関連したことを書いていこうと思います。でももうちょっと先かな。

## 第10話 判断(前書き)

私は絶望したのだ、だから、貴様にも私の絶望を見せよう。  
シリユウ

## 第10話 判断

1

「吐け！魔法書は何処だ！！」

ギンは倒れたマルマルの襟を掴んだ。

「おおおしええるかよおお」

ガン！

「吐けよ、コノヤロウ！！」

「だからあ、おしえるかよお」

バキッ！！

「いい加減にしやがれ．．．」

ゴン！！

なかなか口を割らないのでギンはもう一度殴ろうと、拳を振り上げる。マルマルは慌てた。

「ああ、ストップストップ！！」

ギンの拳はマルマルの鼻に触れた所でとまった。

「やっと吐く気になったのか？」

「痛いのはあ、つれえからねえ」

「とつとと言いやがれ！魔法書は何処にある！！」

「魔法書は．．．お頭のシリユウ様が持つてるよお」

「頭？てかどんな書なんだ？」

「禁呪．．．だよお」

「禁呪？」

どんな物かは分からないが分かる事は、ヤバい物という事だ。マルマルは満面の笑みを浮かべながら得意気に吐いた。

「そう、悪魔を復活を復活させるなあ」

「お前等の目的は一体なんなんだ．．．？」

「それはなああ．．．復讐だよお」

そして、マルマルは全てを話し始めたのだった。



2

闇が彼を襲った、黒魔法の中でも大威力を持つ上級魔法。

「暗黒魔法、暗黒の时空アルテミシア……」

デルミルは天を仰ぐ様に、魔法を発動した。

「うわ?!」

ガイは暗黒に包まれた。

「何も……見えねエ!!」

何も見えないのだ。

永遠に近い程の暗黒を切り裂いて、何かが見えた、光っている。

それはだんだんと近づいてくる。

隕石だった、数えきれない程の数。それがガイ目掛けて飛んでくる。

「うわああああ!!!!」

逃げようと足を動かそうとする、だが何かに縛られていて動く事も出来ない。

「ぐあああああつ!!!!!!」

やがて、大量の隕石はガイに激突した。

暗黒は解けたが、ガイは力尽き、地面に倒れていた。

3

「ハアハア!!どこだ!!シリユウ!!」

ギン達とはかく屋敷の廊下を駆けていた。ギンとソフィとミレウはマルマルの吐いたシリユウの目的を聞いて、一刻も早くシリユウを止める為に走っているのだ。

廊下の途中で、ミレウが止まる。

「どうした?」

「魔法だ!」

正面から炎が飛んでくる、それをミレウは素早く防御魔法で対応

した。

「誰だ!!」

奴隷だった手下達は、もういない筈だ。という事はやはり黒魔導士だろっか。

「ここに来たという事はマルマルが．．．吐いたんだね。手下共はいや、奴隷達もやられたか．．．」

「仕方ないんじゃない、マル×2弱いし」

二人の男女が会話をしている、しかも驚いたのはそれだけではなかった。男は正面に居て、女は背後に居たのだ。

男は、髪が長く、腰までのばしている、そして手にはギンと同じくらいの長さの剣を持っていた。色は緑、剣にしては少し特殊な剣だった。

女は、男とは逆に、髪は短めで、金色の瞳からは強い意志が感じられる。

「てめえらっ、この先にシリユウはいるんだな!!」

「自分の目で、確かめるんだね」

「ちっ!!」

男は、ふわりと浮いて止まったかと思えば、そのまま一気にソフイに向かって飛んできた。

「ソファイ!!」

男の剣をミスリルソードで受け止める。

「っ!!!! (強いっ!!!!)」

衝撃が剣を伝わって、ギンの体中に響いてくる。それを無理矢理押さえつけて男の剣を弾いて、体の体重を乗せて突いた。

だが、それは空振りに終わる。またふわりと浮いて、避けたのだ。

「ミレウさん!!こいつは俺に任せてくれ!!」

ギンはミレウに背中を向けたまま叫んだ。

「馬鹿な、もう戦えない程ポロポロになってるだろう、俺に任せてさがつている」

それもその筈、マルマルの爆撃をあれ程受けて、剣を握るのにも

困難な程の重傷をうけているのだ。

相手の魔力からして、到底勝ち目など無い筈だ。

だが、ギンの後ろ姿を見ると、この男はどれだけ説得しても、相手と戦うだろう。と、そういう風に見えた。だがミレウは説得を試みた。

「ギン、今のお前では勝率は限りなく0に近い．．．たとえばストコンデイションでも同じだ」

「俺はツ．．．!!」

勝てないという事は分かっていた。普通に任せておけば良い事は分かっていた。

自分の後ろにソフィがいる。

あの時もこんな風だった、けどあの時は守れなかった。

相手はソフィを付け狙っている、それはマルマルの時もだった。

そしてマルマルの吐いたシリユウの目的からして、ソフィが関連しているように見える。

目の前に居るソフィとギンの知っているソフィが別人だとしても、これはギンの覚悟だった。

ソフィを助ける、ソフィを護る。

それは何者にも揺るがす事の出来ない、ギンの中に植え付けられた、ギンを動かし続ける、全てなのだ。

だから、退き下がれなかった。退き下がらない。ギンは叫んだ。

「ソフィを護るんだっ!!」

「ギン．．．」

何故か、ソフィの？を冷たい涙が伝わった。これはソフィ自身の涙ではない、でも何か大切な事を思い出だした様な懐かしい何かを感じた、それが何かは分からないが、涙を拭って笑顔で応えた。

「ありがとう」

「ミレウ．．．いいか？」

この二人の様子を見て、ミレウは半ば飽きれていた。フツ、色恋だ事だ．．．。と笑みをこぼした。

「仕方ないな．．．任せよう」

「ああ！！」

格好のいい場面を見ながら、黒魔導士の男は薄ら笑いを浮かべながら、魔法で体を浮かせた。

「フン．．．もういいかな？そろそろ見物も飽きてきたんだけど．．．」

「ああ、ごめんな、もう少し待ってくれ」

ギンは丁寧に戻し、もう一度ミレウに振り向いた。

「ミレウ．．．ソフィは頼んだ！」

この男はソフィだけを狙っている、という事はここでギンが止めれば良いという事だ。

「ああ．．．女の方は任せろ」

のんきにあくび等している女の方に振り返ると女は反応した。

「お話の長い人たちねえ」

「フン．．．覚悟するんだな．．．」

最後に、ミレウはギンの方に振り返り杖を取り出した。

「回復魔法だ．．．死ぬなよ．．．」

魔法のおかげで体が軽くなった気がする。さっき迄の痛みは失せて、体の傷が癒された。

「ありがとう」

小声で礼を返して、ギンはミスリスソードを構えた。

「おっと、話は終わりで良いのかい？」

「待たせたな．．．」

相手はふわりと浮いては、ぐるぐると飛び回った。

「じゃあ、いいんだね？言っておくけど僕は黒魔導士の中では、一番魔力が高いからね」

「君のレクイエムを．．．奏でてやろうじゃないか」

ギンは剣を構えて、走り出す。

「残念だが．．．死ぬつもりは無え！！」

第10話 判断(後書き)

タンカだけの一話になった気がするぞ・・・

## 第11話 (前書き)

何故、死ぬと解っていて生きる。生きる勇気が無いのなら生まれて来なければ良いんだ。

## 第11話

1

ゲルド盗賊は、十八年前に六人の魔導士と一人の男が結成した少数派の盗賊だった。

この盗賊達は、数年も経たないうちに闇世界では知られる程の盗賊となった。

そして闇世界の中の同盟「ベルクス同盟」に入った。

ベルクス同盟は闇世界の中でも軍事力の高い組織同士が争わない様に、闇世界の者同士が組んだ同盟である。

同盟を組んだ組織は三つ、その中に入るのがギン達が戦っているゲルド盗賊だった。

ゲルド盗賊は周りの組織とは目的が異なる組織で、何か質の違う悪行を成してきた盗賊だった。魔導書のみを執拗に狙う集団で、今迄も様々な魔導書が盗まれていた。そもそも彼らは盗賊ではなかったらしく、ただ魔導書を盗むから、盗賊と云われてきたのだ。それも、希少な上級魔法のみを盗む。だが王国や政府はその内容を公表しなかった。

城や街の魔導書を奪うときは必ず、意味も無くその街を攻め込んで焼き払ったり攻め落したりと、意味深な行為をしてきていた。だが、焼き払った街から奴隷を拾ってきたのは今回が初だった。今迄は奴隷を解放してやるだけで、仲間にするのは本当に初めてだったのだ。

だから、王国には彼らの目的が読めなかった。次々と魔導書を盗むのも、奴隷を解放するのも。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1542r/>

---

クラッド

2011年7月3日03時31分発行